

# ミュージアム通信



「十二月ノ内 師走 餅つき」(部分)・豊国・国立国会図書館所蔵

## お江戸の行く年・来る年

[資料室談議 第8回]

『都風俗化粧伝』より抜粋・解説  
江戸の女性のヘア・ケア

[商品開発リポート]

世にも美しい漆製紅パレット・  
板紅制作リポート

## お江戸の行く年・来る年

「もういくつ寝ると…」  
江戸の年末スケジュール  
歳の瀬が迫り、何かと  
慌しくなる時節、江戸の家々  
では年越しの準備が始ま  
る。

【十二月八日・御事始】

この日より、来る正月  
に備え、諸々の支度に着  
手することから「御事始」  
と名が付いた。当日は「御  
事汁」を飲み、これ以降年  
内を、正月に向けて抜か  
りなく過ごすための心掛  
けとした。

【十二月十三日・煤払い】

武家・町家を問わず、こ  
の日は煤払いが行われた。  
江戸時代初期、江戸城中  
で行ったのが恒例となり、  
武家から町方へと徐々に  
この習慣が移っていった。  
掃除が終わると、酒肴・祝  
儀等が振る舞われ、皆で  
主人を胴上げして羽目を  
外すこともあった。一家  
総出の賑やかな行事だっ  
たのである。

【十二月十三日〜二十八日頃・節分】

旧暦では、節分を年内に迎えることが少なくない。本来は春を迎えるための行事である。この日、家々では、玄関や軒先などに柀の小枝や鯛を挿し、豆撒きをした。「鬼は外、福は内」という掛け声は、室町時代の頃より行われるようになったという。

【十二月十四日・歳の市】

煤払いの翌日から、深川八幡宮を皮切りに、浅草寺・神田明神・芝愛宕社と、各所で大晦日まで歳の市が行われた。とくに浅草寺の歳の市の賑わいは、境内だけでなく周辺の通りにまで及ぶ、まさに江戸の大市であった。隙間なく立ち並んだ露天では、注連飾り・破魔矢・羽子板をはじめ、様々な食料品が売られた。

【十二月十五日・餅つき】

この頃より、正月用の餅の準備が江戸中の家々で行われるようになる。



「十二月ノ内 師走 餅つき」豊国・国立国会図書館所蔵

武家や商家では自家で餅つきを行ったが、たいていは餅つき屋に頼んだ。餅つき屋が注文を受けた家の前で行う餅つきを「引きざり餅」といい、江戸市中を巡って、勇ましい音を響き渡らせたという。大晦日の夜明けまで続いた餅つきの音は、さながら歳の瀬カウントダウンといったところか。

【大晦日】

一年の最後の日、江戸

市中の店先には新調された暖簾が掛かり、注連飾り・門松が立てられる。吉原ではこの日、一年の締め括りとして狐面をつけた獅子舞(狐舞)が笛太鼓の囃しに合わせて舞った。そして大晦日の喧騒が止む頃、百八つの鐘が鳴り響く。江戸の一年が終わるのである。

**新春、御慶申し入れます**

【元旦未明・初日の出】

深川洲崎の堤上は、江戸きっての初日の出の名所。人々は新調した着物をもと、朝日を拝した。



「江戸名所 洲崎初日の出」広重・国立国会図書館所蔵

【元旦・恵方参り】

今年一年の福徳を授かるために、その年の恵方(吉方)の方向にあたる神社仏閣に参拝に向かう。これを恵方参りといった。

【二月一日・初夢】

一年の吉凶を占うとして重んじられた初夢。当初大晦日の夜に見る夢を初夢といったが、十八世紀後半頃には二日の夜に見る夢を指すようになった。元旦の朝より、良い夢を見る呪いとして「宝船の絵」を売り歩く行商の姿があった。

【二月一日・よろず物始めと年礼】

江戸の町が動き出す日である。年始の挨拶回り「年礼」が行われ、商家では初売りに精を出す。往來には凧揚げや羽根突きに興じる子供等の姿、曲芸や獅子舞を披露する太神楽、そして様々な物売りの売り声が賑々しく飛び交った。町火消しの出初めが行われたのもこの日である。

【二月七日・松の内】

元旦から松飾りを取り除く日までを松の内という。当初七日の朝に除いたが、後に六日の夕方に言うようになった。六日深夜から七日早朝にかけては、七草をまな板に載せて包丁や棒で打ち、七草粥の準備に掛かる。

【二月十一日・蔵開き】

商売繁盛を願って、今年最初の蔵を開く日である。商家にとっては新年恒例の重要な行事だった。なお、当日は鏡開きの日でもあり、割った餅で雑煮を作り、蔵の前で祝宴を催した。

さて、概ねこのようにして過ぎて行った江戸の年末年始である。かくも賑々しき様が目に浮かぶようだ。

※1 里芋・こんにやく・人参大根・牛蒡・焼豆腐・赤豆を入れた味噌汁。

※2 当時の一般的な新春の挨拶は「明けましておめでとう(さいいます)」ではなく、「御慶申し入れます」だった。

『都風俗化粧伝』より抜粋・解説  
 江戸の女性のヘア・ケア



**女性**の美しい黒髪を  
 さして「濡羽色ぬ  
 ればいろ」という。かつて  
 吉田兼好がその著『徒然草』  
 のなかで、「女の髪のため  
 たからんこそ人の目たつ

べかんめれ」としたように、  
 女性の美しさを主張する  
 にあたり、髪がもたらす  
 印象は大きい。遡って『源  
 氏物語』末摘花にも、光源  
 氏が「豊かな黒髪をもつ」  
 と噂で聞き及んだ末摘花  
 のことを、大層な美人で  
 あるうと期待して文を送  
 る場面がある。これは、髪  
 の様の素晴らしさがすな  
 わち美人を連想させるに  
 足る重要なアイテムであ  
 った証左にほかならない。  
 「髪は女の命」などと言  
 うが、これはあながち大言  
 でもないのだ。

さて、では江戸の女性  
 のヘア・ケアとはどのよう  
 なものだったのか。以下  
 に紹介していこう。

【洗髪】  
 現代人のように毎日洗  
 髪していたわけではない  
 が、夏場などは頻繁に洗



例えば、顔良しスタイル良し性格良し、  
 三拍子揃った女性がいたとする。しかし、  
 その女性の髪が傍目に見てもわかるほ  
 ど汚れ、痛み、バサついていたら…？  
 女性にとって髪の手入れも大事な身嗜み  
 のひとつ。今回は、江戸の女性のヘア・ケ  
 アについて紹介する。

髪を行った。髪油と汗と  
 が混ざって悪臭を放つ  
 ので、「たびたび洗う」こと  
 でこれを防止した。今の  
 シャンプーに相当するも  
 のとして、ふのり(海蘿)と  
 うどん粉を用いた。まず、  
 熱い湯でふのりを解かし、  
 そこへうどん粉を混ぜる。  
 次にそれを髪へ擦り付け、  
 揉み込むようにして全体  
 に行き渡らせる。その後、  
 湯で洗い流すと、髪油が  
 きれいに落ちたという。

【髪の艶出し・カラーリング】  
 抜け落ちた髪などをよ  
 く洗い干した後、胡麻油  
 で煎じて炒る。それを細  
 かく砕く。その粉末を髪  
 に擦り付けると、黒々と  
 した艶のある髪になった。

【若白髪防止】  
 白髪を抜き去った毛穴  
 に、よく磨り潰した胡桃(く  
 るみ)を擦り込むと、そこ

から黒髪が生えてきて、  
 二度と白髪にならなかつ  
 たという。

【フケ防止】

側柏葉と胡桃、梨子、訶  
 子を搗いて砕き、井戸か  
 ら汲み上げた水に半時  
 (約1時間)ほど浸す。それ  
 を髪に直接塗るか、ある  
 いは櫛に付けて髪を梳く  
 と、フケの防止になった。

余談だが、『江戸買物独  
 案内』には、「白髪染め」や  
 「毛生え薬」を扱う問屋が  
 載っている。需要の生々  
 しが垣間見える一例で  
 ある。

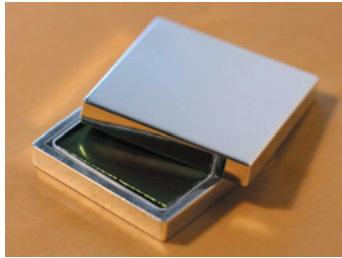
※1 女の髪的美しさが人目につくこと  
 ※2 フノリ科の紅葉。  
 ※3 訓・コノテガシワ。ヒノキ科の植物  
 の一種で常緑針葉高木の葉。  
 ※4 訓・カン。別名カラカシ。シクンシ科  
 の高木で、主成分はタンニン。  
 ※5 文政二年刊「江戸のショッピング  
 ガイド」誌。

# 漆工の美をモダンに表現 世にも美しい漆製紅パレット・板紅制作リポート

伊勢半本店は、二〇〇八年七月より漆芸家・稲見なつえさんと、漆製板紅の制作に取り組んでいます。制作条件として当社が掲げたのは、①携帯できる仕様、②紅はリフィル式、③意匠は受賞作品の「波の花」を踏襲する、④販売価格は五万円前後、以上の四点です。

現代女性が日常的に携帯するにあたり重視したのは、強度や耐久性。ボディを銀製にし、漆を焼き付けて仕上げました。形状は、江戸時代の板紅にも多く見られる箱型に。また、板紅を納める布製ケースもお付けします。

リフィルは、漆を塗った木製プレートに紅を刷く仕様です。初回以降は、



存在感ある銀製ボディ。蓋面上部に漆を焼き付け、加飾を施します。



蒔絵や螺鈿を施した加飾の意匠案。

販売価格は、現代女性に紅と漆工の世界をお伝えたいという思いから、五万円前後で販売できるように調整しています。現在、製品化に向けて、最終仕様を審議中です。

【稲見なつえプロフィール】  
石川県立輪島漆芸技術研修所で技術の習得に励んだ後、漆芸家として活動を開始。蒔絵や螺鈿など精緻な技法が溢れる作品を制作しています。

リフィルだけをお買い求めいただけます。加飾の意匠は、前述の通り「波の花」を踏襲し、何パターンも制作した中から、最終的に二つ選出しました。

発売は、二〇〇九年四月十日を予定。個数は、五十個限定です。次号では、完成品をご紹介しますので、どうぞご期待ください。

※「波の花」とは、今春開催した当館特別展「甦る江戸の化粧道具―板紅―」に出品した稲見さんの作品名。開催前に行われた有識者による作品審査会で準グランプリを受賞。また、米館者による作品人気投票では、一位を獲得。

## Information

## かわら版

### 講座のご案内

江戸時代の女性たちは、紅・白粉・墨で粧いました。現代の女性がTPOに合わせて化粧をするように、当時の女性たちも、室内、屋外、季節、年齢など、様々な条件に合わせて化粧をしていました。当館定期講座の「江戸の化粧再現講座」では、当時の化粧書や美容指南書をもとに研究した内容を、化粧デモンストレーションとともに発表いたします。

### ■「第4回江戸の化粧再現講座 ～白粉化粧テクニック～」

本講座では、白粉の種類や質等の話から化粧テクニックまで、学芸員の解説とともにご覧いただけます。初めての方にも解りやすい内容です。多くの方のご参加をお待ちしております。

要予約・定員各回15名・参加費無料

2009年2月7日(土) 第1回 午前11時～12時 / 第2回 午後2時～3時

※内容・申込詳細は、ホームページに掲載いたします。

### 寒中丑紅キャンペーンスタート

12/1～1/31の間、小町紅ご購入者に「寒中丑紅」の恒例行事だった丑の置物を差し上げます。ぜひ、この機会にお求めください。

※江戸時代、寒中に製造された紅は特に良質と言われました。紅屋は、寒中丑の日を特売日とし、景品に丑の置物を配りました。



### Since 1825 伊勢半本店 ミュージアムのご案内

●開館時間 / 午前11時～午後7時 ●休館日 / 毎週月曜日 ●入場無料 (月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL&FAX:03-5467-3735  
東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehan.co.jp>